船井情報科学振興財団 卒業報告書

2024 年 4 月

2018 年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生 大岸誠人

1. はじめに

2018 年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生の大岸誠人と申します。2018 年 9 月からロックフェラー大学博士課程に進学しました。通算で 5 年と 8 か月のロックフェラー大での研究生活も幕引きとなり、二週間ほど前に Defense を終了しまして、今年 6 月 6 日に正式に PhD を取得予定です。

2. 卒業までの大まかな流れ

この機会に My NCBI 等のサイトで確認しましたが、これまでに 37 本の筆頭ならびに共著論文が公開となっています。学部生の時の論文が 6 本なので、博士課程中に 31 本が公開されたことになります。最も、筆頭原著論文以外はオマケのようなものだと各所で聞きますので、ここでも詳細は割愛します。筆頭原著論文は博士課程中に 6 本が公開、2 本はまだリバイズで戦っている状況です。どちらも一年以上リバイズで戦っていて、結局卒業までに仕上げきれなかったのでラボの人たちのヘルプを頼む形になってしまったのは心残りなのですが、なんとか完成までもっていきたいと思っています。余談ですが、多数の論文投稿を経験したことで、結果としてピアレビューの良し悪し、エディターとのやり取り、読者（レビュアーやエディターを含む）にとって読みやすい論文の書き方、といったことについても入学当初より格段に視野が広がったように思います。現時点では今後も研究主体の生活を続けていく予定ですので、こうした経験を今後も活かしていければと思っています。

ロックフェラーでは PhD 5 年目までは大学の Funding で全額給料や保険などが賄われますが、6 年目以降は各ラボで資金を出すということになっています。僕の場合はありがたいことに PhD 4 年目の時点で National Cancer Institute (NCI)の F99/K00 Award を頂くことができましたので、PhD 6 年目の終わりまでは F99 が代わりにカバーする形になっていました。なので、6 年目の終わり頃に卒業する方向で準備を進めてきました。K00 のポスドク先としてスタンフォード大学の Chris Garcia にアプローチしたのが昨年の 1 月末頃でした（なので 1 年以上も待たせてしまっています！）。ポスドク先としては、現在の博士課程で培ったスキルを部分的に活かせつつも異なる分野で新しいスキルや人脈を獲得するという目標に加えて、研究分野やアプローチが独創的でいわゆる”よくある研究テーマ”の型に収まっていない点、Funding が充実している点、ここ数年の卒業生で少なくとも 10 名程度が米国内外で PI として独立している点、を鑑みて選びました。Zoom での面談を終えてオファーをもらい、8 月ごろに現地に研究室見学に行き面談とラボメンバーからの研究テーマの紹介を受けました。8 月末から 10 月頃までは学会が集中していて、11 月は K00 の申請書を完成させることに忙殺され、12 月から 3 月初旬までは（今も戦っている）2 本の論文のリバイズに忙殺されていたため、結局博士論文は 3 月の 2 週間ほどで書き上げました。うちのボスは博士論文は一切編集しないと公言していたので、いちおうざっと目を通してもらい、そのまま提出しました。

3. Defense

ロックフェラーでは 2 週間前にリハーサルとして大講堂で発表の練習をする機会が与えられます。リハーサルでラボメンバーから意見をもらい、スライドはぎりぎりまで修正しました。Defense 当日はスムーズに、おそらく 40 分ほどで発表を終えられました。ラボメンバー以外にもちらほらと見知った PI の顔ぶれも見え、大講堂いっぱいというわけではないですが 100 人いかないくらいの人が来てくれていた

ように思います。その後の closed discussion ではコミッティーの先生方からの質問に答えていきましたが、正直思ったほど深い質問はなく拍子抜けでした。結局 40 分ほどで合格ということであっさり解散し、Thesis も修正なくそのままファイリングされることになりました。Defense の後は着替えてラボメイトたちがお祝い会を開いてくれました。僕の名前の頭文字である MO の形のヘリウムガス入りの風船？を買うためにマンハッタンの西側の店にポスドク・院生の数名で買い出しに出かけてくれていたらしく、そこから東側のキャンパスまで風船を引っ張りながら徒歩で帰ってきたといっていました。祭り好きなメンツだなとは思っていましたがそれにしても予想外の大行軍！だったようです。ラボメンバーからはほかにもシャンパンやら寄せ書きやらの詰め合わせをもらいました。特にこの 1 年半ほど指導していた学部生の子からは寄せ書きとは別のメッセージカードとさらにワインももらいました。皆忙しい（はず）なかで本当にありがたいことで、メッセージカードなどは生涯の宝物です。

Thesis talk 終了直後、質疑応答。

ラボコーヒールームでのお祝い会。

4.　PhD を振り返って

思えば「海外の大学院に行けば学費がかからないどころか給料ももらえるらしいぞ」などという不純な動機で留学先を探し始めてからもう 8 年近くが経った計算になります。今思えば、米国はともかく欧州等では学費もかかるはずなので、この思い込みは半分間違っていました。加えて、学部時代は国試やら実習やらで忙しく、そういった留学の準備を本格的に始めたのは結局初期研修が始まってからでした。１，２か月で科が変わるたびに業務に慣れていかなくてはならないという状況の中で留学の準備等もあり、今から振り返ればなんともストレスフルな道のりだったなぁと思います。人脈もなく、身の回りにそういったキャリアパスを進んでいる先輩などもいなく、自分のやりたいこともぼんやりとしか見えていないようななか、手探りで書いたメールに唯一返事をくれた（送ってから 3 時間くらいで返事がきました）のが現ボスの Jean-Laurent でした。間違いなく厳しい人ではあったと思いますが、最初は色々と指導をくれつつ、段々と色々な場面で仕事を任せてくれるようにもなり、励ましてくれたり相談にも乗ってくれたりもしました。あと、ラボメンバー数名と外部ゲスト等あわせてのフレンチやらイタリアンやらのディナー会が頻繁に開かれるのは、なんとなく美食家が多いフランス人のイメージによく合っていると思います。他のラボの人たちに聞く限りでは、これほど頻繁にディナー会が開かれることは米国ではまずないそうです。初めのころはびびっていましたが、意外と面倒見の良い人だなと思うようになり

ました。これは私見ですが、PhD の 6 年間をこのような成果主義ではありつつも意外に面倒見の良いというバランスの良いラボで過ごせたのは僕にとっては非常にラッキーだったと思います。次のステップであるスタンフォードの Garcia ラボはもっとドライで常在戦場という感じで、大きな成果のためにみな血と汗と涙を流す場所という気がしているので(実際に行ってみたら違うかもしれませんが)、今の僕がポスドクとして行くなら大丈夫だと思いますが右も左もわからない PhD 一年目の学生などにとってはちょっと辛いところなのではなかろうか、というふうに感じます。

現ラボメンバー及び卒業生約 80 名の集合写真。ラボ同窓会＠フェロー諸島にて。

5.　最後に

つてもなく、大学院留学の右も左もわからない中で船井情報科学振興財団のホームページにたどり着いてからはや 8 年近くが経ちました。財団にとっても、医学部出身者としては初めての奨学生であったという風に伺っています。船井財団の皆様や先輩奨学生の方々から頂いたご支援やアドバイスの数々は本当に役立つものばかりで、心の底から感謝しています。この研究留学を通じて乗り越えた苦難や広がった人との繋がり、研究者としての成長など、いずれもかけがえのない経験であると感じています。次は僕の番だと思っていますので、留学直後、バイオ・医学系の奨学生の方などで訊いてみたいことがあるという方は財団経由でも直接でも構いませんのでご一報ください。忙殺されていなければ可能な限りお答えしようと思っています。以上で博士号取得の報告とさせていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。